



数日前まで降り続いていた雨のおかげで、いつもよりも、幾分か気温が落ち着いていた。

今朝方まで、降っていた雨は、今では、雨雲ひとつ見当たらず、久しぶりに青空を拝める。

雨上がりの爽やかな風と、真っ青に広がる空は、絶好の洗濯日和だった。

清々しい気候の中、屋根の上では2つの影が、忙しなく移動していた。

涼やかな風が全身を掠めていくのが心地好くて、頬を緩めていたハンジは、雨水に足を取られて滑りかけた。

「おっと、滑る滑るっ！」
落下すれば軽傷では済まない高さに、肝を冷やしつつも、器用な足裁きで体制を整え直す。

そして、遅れを巻き返すように速度を上げる。

その背後を、難なく追走してくるのは、ハンジよりも小柄な人物だった。

「てめえ、待ちやがれっ！」
「ご機嫌なハンジとは裏腹に、後方から怒気を含んだ声を放つリヴァイは、足元を滑らせる事もなく追ってくる。

数分前までは、兵舎の中に居た2人は、立体軌道装置も付けてないどころか、訓練の時間ですらない。

常人なら足を竦ませるような場所でも、軽快に駆け抜けられているのは、日頃の訓練のたまものだった。

しかし、こんな所で訓練の成果を見せても、なんの役も立たないが、兵舎の屋根を使った追いかっこが続いていく。

屋根の棟を走り抜けたハンジは、軽々と隣の屋根に飛び移ると、ポニーテールの尻尾も跳ねさせる。

涼やかな風に包まれ、自由自在に飛び回っているハンジは、楽しそうに声を弾ませた。

「アハハハ、きつもちいいいっ！」
中々縮まらない距離に苛立つリヴァイも、近場の屋根から、同じ屋根へ勢いを付けて飛び移ってくる。

「待ってっつてんだろー！このクソ、メガネっ！」
屋根中を飛び回っているせいで、兵舎の中からは、2人の姿が窓の外に映ったり消えたりする。

それを、目にしたエルヴィンは、裁決待ちの書類を片手に

呟いた。
「何をやってるんだ、あの子達は……」

呆気にとられるあまり漏らした言葉は、部下に対してと云うよりは、やんちゃな子供を相手にしているような口

ぶりだった。

苦笑を噛み殺すエルヴィンに、同じ窓から眺めていたニケも、鼻で笑い飛ばすだけだった。

2人の技量なら余程の事がない限り、落下の心配はないが、遊び場にするには危険すぎる。

注意をしようと、窓を開けかけたエルヴィンに、それを見越したように、徐にハンジが屋根から飛び降りていく。

「いやっほお〜っ!」

爽快な気分の中庭の大木に飛び移ったハンジは、慣れた身のこなしで地面に着地した。

地面に足が着く安心感と安定感に、軽く頬を緩めた瞬間、すぐ隣の井戸で洗濯していたナナバから、苦いため息が聞こえてくる。

こんなところで、ナナバに会うと思っていなかったハンジは、虚を突かれて、目を丸くさせる。

しかし、先程から、屋根の上を飛び回るハンジを、下から眺めていたナナバは、今更驚くハズもなかった。

「ハンジ・アンタ、さつきから何やってんの?」

呆れ混じりの冷静な問いを向けられ、一瞬だけ言葉に詰まったハンジは、きまり悪そうに乾いた笑みを返していく。

「鬼?」…かな?」

反射的に答えを捻り出した時、リヴァイも先ほどのハンジと同じように、鮮やかに木を伝って降りてくる。

慌てて体制を立て直したハンジが、再び走りだそうと数歩地面を蹴った瞬間、ナナバの淡白な声が聞こえてきた。

「そこ、ぬかるんでるわよ」

「え?」

耳を疑う台詞を聞き返すよりも先に、両足を滑らせたハンジは、なす術もなく無様に転倒した。

ぬかるみの中に、尻餅をつく形で座り込んだハンジは、腰から下が泥塗れになった姿に啞然となった。

しかし、次の瞬間には、それすらも面白くなったのか、盛大に吹き出すと大笑いし始めた。

「アツハツハハツ!どつろどろお〜、こんなキレイにすっ転んだの久々だわ〜!」

バカ笑いを続けるハンジを余所に、大股で歩み寄ったりヴァイは、容赦なく首根っこを掴むと、肩で息を繰り返していた。

「クソメガネ、逃げ回ってんじゃねえ〜」

襟首をガツチリと掴まれたハンジは、少し残念そうではあったが、悪びれもなく空々しく笑った。

「ゴメンって〜、何回も謝ったじゃ〜ん」

とても謝罪しているとは思えない言動に、更に苛立ちを募らせたリヴァイが、舌打ちを繰り返す。

しかし、しつこいと言いたげに肩を竦めるハンジを余所に、洗濯の手を止めずに2人の様子を窺がっていたナナバは、リヴァイの襟元が、茶色く染まっている事に気付いた。

「今度は何をやらかしたんだが……」

ため息混じりに小さく呟くナナバに、リヴァイは普段以上に鋭い目を向けた。

「このクソメガネに、コーヒーぶつかけられたんだよ」

思い出しただけで、胸くそ悪いと言いたげに吐き出す姿に、もう何度目か分からない言い訳が、ハンジの口から零れ落ちていく。

「だから、わざとじゃないんだって」

故意であれば激怒に値するが、今はそれ以前の問題だった。

「その前に、廊下歩きながら飲んでんじやねえよ！」

コーヒーを掛けられた事よりも、行為そのものを怒られた途端、反対側からも叱咤が飛んできた。

「またあゝ？もう行儀が悪いんだから！何度も止めなさいって言ってるでしょ」

「いや、ちょっと急いでてさ、アハハ」

藪蛇だと思いつつも、空々しく笑って誤魔化すハンジに、これ以上説教を続けても無益なのは、この場に居る全員が分かっている。

だからこそ、苦々しいため息だけ零したりリヴァイは、いつしか、底意地の悪い笑みに変わっていた。

「……たく、ついだ、てめえも、丸洗いしてやる！」

服を汚された恨みだと言わんばかりに、ハンジの後ろの襟首を掴んだまま、引きずって歩き始めた。

「ちよつ、え？今？……ムリムリ、すぐ戻らないと……」

「知るか？！そんな恰好で歩き回られる方が迷惑だ」

これ以外の譲歩ないと言いたげなりヴァイに、不服そうに顔を歪めたハンジは、何とか逃れようと体を捻ってみる。

しかし、力で叶うはずもなく、徐々に遠ざかっていく視界の中、ナナバに笑顔で手を振られる始末だった。

「行ってらっしゃい」

清々しい笑顔で見送られてしまい、大きく肩を落としたハンジは、諦めた方が賢明だと気付かされる。

仕方ないと言いたげに、ため息を吐き出したハンジは、勢いを付けると、リヴァイの動きに合わせて、しなやかな動作で立ち上がった。

完全に立ち上がれば、襟首を掴む手が、身長差的に敵し

い位置になり、早々に手を離れたリヴァイは、忌々しそうに舌打ちする。

しかし、代わりだと言いたげに、手を重ねるハンジに、その手を強めに握り返したリヴァイは、嘆息を零した。

連行していたハズが、いつの間にか、揃って散歩でもしているようで、何とも言い難くなるが、リヴァイの部屋に着くまで手を離されることもなかった。

それから、一時間後。

言葉通り丸洗いされたハンジが、着替えがない事に気付いたのは、風呂から出た直後だった。

「着替えな〜い、リヴァイ、服貸して〜」

流石に泥塗れの服を、再び着る勇気がないハンジに、安堵したリヴァイから、投げ寄りすように服が飛んでくる。

「ほらよ」

身長差があるものの、男性用のおかげで、大した違和感もなく着る事が出来る。

元々、研究に没頭すればする程、風呂どころか、ご飯すら口にしなくなる。

それを、問答無用で机から引き剥がす役は、大抵リヴァ

イだった。

そのせいか、慣れたやり取りすぎて、服を借りるくらいでは、胸が弾む事もなくなった。

それでも、久しぶりに袖を通したリヴァイの服に、僅かに口の端を上げたハンジは、いつもと同じ感想を漏らす。

「リヴァイの匂いがする」

「俺の服だからな」

当然だと言い切るリヴァイに、満足そうに笑ったハンジは、軽く手を上げながら踵を返した。

「覚えてたら、後で返しにくるよ」

曖昧な約束を告げたハンジは、まだ濡れ髪から雫が落ちるのも気に留めずに、そのまま廊下に出ようとする。

面倒だと思いつつも、腕を強く引き寄せたリヴァイは、そのまま強引にソファーに座へ沈めた。

「その恰好で出るなっ、髪もちゃんと拭け」

小言が終わるよりも先に、タオルで頭を掻き回され、小さな笑い声を上げたハンジは、まるで、歌でも歌うような口振りで囁いた。

「リヴァイって、ホント、世話焼き女房って感じだよね〜」
 楽しげな声を弾ませて笑うハンジは、恋人と云うよりは、
 ビツタリ過ぎる表現だと、自画自賛する。

しかし、凍りつくように固まったりリヴァイは、じわじわと沸き上がる感情が瞬く間に心中へ広がった。

そして、自嘲じみた笑みを浮かべた途端、正面から髪を拭いていた手が、乱雑に変わっていく。

「誰せいだ！お前がだらしねえからだろ〜が」

徐々に荒々しさが増していく手と、にじり寄る剣呑な圧迫感に、リヴァイが怒っているのは、顔を見なくても分かる。

それでも、良い例えだと思っていたハンジは、意見を覆す気もない。

「そ〜だけど、でも、ピツタリだど…イタタタツ！」

実力行使で、最後まで言わせてもらえなかったハンジは、痛みから逃れるように、一気に体を後ろに引き抜いた。

「もう、痛いじゃないか〜」

不服だと口を尖らせる顔に、使っていたタオルを投げつけたリヴァイは、厭味つたらしく吐き出していく。

「つたく、こんなに世話焼かせられるのは、お前くらいだ」

「イテツ！」

顔面を受け取る羽目になったタオルを、首に掛け直したハンジだったが、忌々しいと言いたげに視線を逸らすリヴァイが、本気で怒っているわけでない事を熟知している。

照れくさそうに横を向く頬が、僅かに赤みがかっており、それに破顔したハンジが、飛びつくように抱きついていく。

「クソかわつっ…！」

勢いよく胸元に抱き寄せたハンジは、そのまま頬や、目元や、眉間にもキスを落としていく。

突拍子もない言動に、啞然としていたリヴァイは、大きく舌打ちする事で、気力を奮い立てる。

「てめえ…何を企んでやがる」

「企んでなんかないよ〜、正直な気持ちだもん♪」

僅かに体を離れたかと思えば、屈託なく笑うハンジに、リヴァイは立て直したばかりの気力が、雪崩れていく気分だった。

大きなため息を吐きながら、緩く抱きしめ返したりリヴァイは、押し倒すようにハンジをソファアへ戻らせていく。

そして、押し掛かるように、軽く体重を掛けた時、まだ少し生乾きの頭を撫でてから、啄ばむようなキスをした。軽く触れた唇はすぐに離れたが、抱きしめた腕が離される事はなかった。

「毎日、風呂に入れ、服も着替えろ、ちゃんと髪を乾かしてから寝ろ…それから、コーヒーを飲みながら歩くな」

何度となく言ってきた説教に、さり気なくもう一つ付け

足したりヴァイに、軽く笑ったハンジは、柔らかい物言いで返していく。

「アハハ、次からは人が居ない時にするよ」

「ちげえくだろ」

口約束させたところで、無駄だと分かっているリヴァイだったが、それでも、自然と口から出ていってしまう。

そんなリヴァイを余所に、適当な約束をする気もないハンジは、笑って誤魔化すだけだった。

目が離せない以上、どれだけ振り回されようとも、自分ではどうする事も出来ない。

それを分かっているリヴァイは、諦観に似たため息を零すと、憂さ晴らしのように唇を重ねていく。

端から拒む気のないハンジは、何度も角度を変えては重なっていくキスに、甘い吐息を漏らした。

「…んっ」

徐々に深まりを増していく行為の最中、真っ昼間だった事を思い出させられたのは、無遠慮なノックの音だった。

「リヴァイ兵長、いらつしやいますか？」

扉の向こうから聞こえてきた声は、頻繁に耳にするあまり、顔を見ずとも誰だか分かるどころか、要件さえ検討が付く。

双方共に一気に現実に戻された気分だったが、本来なら仕事の中の身だった。

「ちよつと待つてる」

一言だけ扉に向けるリヴァイの下から、もそもそと這い出てきたハンジは、今更ながらに思い出した事を呟く。

「そうそう、急いでたんだった、すっかり忘れてたよ…」

慌ただしく扉に向かおうとするハンジを、寸前の所で腰を引き戻したリヴァイは、ソファアの背に掛けていたズボンを押し付けた。

「下も履け」

「おおつと、そうだった！」

シャツしか身に纏っていないかったハンジは、急いでズボンを履いたが、裾の長さはどうしようもない。

このままでは、下着も付けておらず、結局は、自室に戻って着替える必要がある。

それでも、人前に出られる姿になったハンジに、満足気に頷いたリヴァイは、ゆつくりと扉を開いた途端、予想通りの人物が立っていた。

「ハンジならココだ」

見透かしたように告げるリヴァイに、安堵の笑みを零したのは、モブリットだった。

「あ、ありがとうございます！」

散々探し回ったのは、額に滲んだ汗が物語っており、心苦しくなるリヴァイを余所に、ハンジは軽やかな足取りで歩み寄ってくる。

そして、扉から身を隠すように、リヴァイの肩に軽く手を添えた瞬間、小さな音を鳴らしながら可愛いキスをした。

「ありがと〜ね♪」

鮮やかな笑みで、柔らかく囁いたハンジは、次の瞬間には、颯爽と身を翻すと、戸口のモブリットに向かって、両手を合わせていた。

「ごめ〜ん、後もうちよつとだけ待って〜」

「時間とつくに過ぎてますよ！」

「すぐすぐ、すぐに終わるから〜」

忙しなく戸口から出ていく間際、背中越しに振り返ったハンジは、満面の笑みで手を振ってくる。

「リヴァイも、また後で来るね〜」

語尾に続くのが、『服を返却の為』なのは分かっているが、不意を突かれたせいで、少し心臓が落ち着かない。

一目散に廊下を走っていくハンジに、モブリットは綺麗に敬礼してから、後を追いかけていく。

「待って下さいよ〜」

まだ静まらない胸元を軽く叩きながら、戸口を閉めたりヴァイは、盛大なため息を漏らした。

いいように振り回されている自分が情けないものの、自由奔放なハンジが相手では、こんな日もある。

自分の思い通りに動くハンジなど、薄気味悪いだけだった。

だからこそ、楽しくも思える事もあるリヴァイは、大きく頭を振ることで、煩惱を追いやると、仕事に戻る事にした。

この数時間後。

爽やかな笑顔のエルヴィンから、揃ってお説教される事など、今の2人には、知る由もなかった。

END

